

役立つ者こそ、役者 ～歌舞伎を通して未来へつなぐ、文化と平和と地球への想い～

歌舞伎役者 中村橋吾



はじめに

舞台に立てない時間が教えてくれたこと。

2020 年春、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大によって、私たちの暮らしは大きく変わりました。行動の自粛が求められ、舞台に立つこともできなくなりました。すぐに公演が再開されると思っていた私は、約 6 か月にわたる休演と休業を余儀なくされました。

舞台に立てない時間は、歌舞伎役者である私にとって、苦しく、不安なものでした。しかし同時に、自分は何のために芸を続けるのか、歌舞伎は社会の中でどのような役割を果たせるのかを、深く考える時間にもなりました。

そこであらためて気づいたのは、サステナビリティとは、環境を守ることだけを意味するのではないということです。人から人へ大切なものを受け渡し、文化や記憶を未来へつなぐ、困難な時代にも希望を失わずに生きること。そのすべてが、持続可能な社会をつくるための大切な営みなのだと思います。

歌舞伎との出会い

受け継がれてきたものを、次の時代へ

私は、最初から高い志を持って歌舞伎役者を目指していたわけではありませんでした。ただ、歌舞伎役者という仕事に興味を抱き、歌舞伎を学ぶために東京へ行ってみたいと思ったことが、この道へ進むきっかけとなりました。

その後、国立歌舞伎俳優養成所を受験し、第 15 期研修生として学ぶ機会を得ました。ある日、歌舞伎座で舞台を見学したとき、私の歌舞伎に対する見方は一変しました。

当時の私は、歌舞伎の言葉や決まりごとを難しく感じていました。しかし、実際に舞台を目の前にすると、言葉では説明しきれない感動に包まれました。気がつけば、涙が止まらなくなっていました。18 歳の私が初めて経験した、心の奥底から震えるような感動でした。

そこには、言葉を超えて伝わる何かがありました。役者が全身全霊を注ぎ、身体と魂を使って表現する芸術。その舞台に触れたことで、私は歌舞伎の本質と魅力に目覚めました。そして、長い年月をかけて受け継がれてきた歌舞伎を、未来へつなぐ一人になりたいと思うようになりました。

そこから、気がつけば芸歴 26 年になります。約 400 年の歴史を持つ歌舞伎の中で、令和という時代に生きる役者として、私は日々舞台に立っています。お客様に感動を届けることはもちろん、歌舞伎という日本の大切な文化を、次の世代へ手渡していくことも、私の使命だと考えています。



2026 年 9 月 山形県鶴岡市「東北エプソン アクアリウムかもすい」クラゲドリームシアター特設会場にて、歌舞伎舞踊「石橋（しゃっきょう）」を上演

ワークショップを通し、文化を「体験」として手渡す

現在、日本の伝統芸能や文化に触れる機会が減り、日本人自身が日本文化から遠ざかっているという現状があります。文化は、関心を持つ人がいなくなった瞬間に、少しずつ失われていきます。だからこそ、文化を守るためには、ただ保存するだけではなく、実際に触れ、感じ、好きになってもらうことが必要です。

私は2010年頃から、歌舞伎のワークショップを事業として行ってきました。その原点には、私自身が歌舞伎に心を動かされた経験を、一人でも多くの方に味わってほしいという想いがあります。

ワークショップで大切にしているのは、実体験です。普段は遠い存在に感じられる歌舞伎を、子どもたちや地域の方々が気軽に体験できる場をつくります。まず私が見本を示し、遊びを交えながら、歌舞伎特有の身体の動きや姿勢に挑戦していただきます。その後、参加者が体験した動きを、私が歌舞伎の感情と表現に結びつけ、全身全霊で演じてみせます。

歌舞伎の魅力は、知識だけで理解するものではありません。身体を動かし、目の前で役者の表現を感じることで、言葉にならないエネルギーが伝わります。肉体と魂による芸術である歌舞伎を、実体験を通して次の世代へ届けること。それが、私にできる文化面での社会貢献であり、文化を持続可能なものにするための実践だと考えています。

ある小学校で全校児童と保護者を対象にワークショップを行った時のことです。自己紹介を始めると、1年生の女の子が目を見せながら、「あつ、知ってる」と声を上げました。そして、ワークショップの冒頭で伝えている「耳・肩・腰は一直線」という姿勢の言葉を口にしたのです。

話を聞くと、その子は以前、保育園で私のワークショップを体験していました。保護者の方は、「この子はあれから、姿勢を正すときにずっと『耳・肩・腰は一直線』と言っているんです」と教えてくださいました。

その言葉を聞いたとき、私の活動が誰かの日常に残り、役に立っていることを実感しました。歌舞伎を伝えることが、単に芸能を紹介するだけではなく、子どもたちの身体や心に小さな変化を生み、その後の人生に寄り添う可能性がある。そのことに気づき、歌舞伎役者になってよかったと心から思いました。

この経験から、私の人生の指針となる言葉が生まれました。

コロナ禍から生まれた創作歌舞伎 -社会課題を舞台にする-

コロナ禍で舞台に立てないのなら、自分で舞台を創ればよい。そう考えた私は、仕事仲間に協力を呼びかけ、社会問題をテーマにした創作歌舞伎をつくりました。舞台に立てないアーティストを支援する映像作品への応募をきっかけに、仲間と力を合わせて完成させた作品が、『世響斯輝伎（よにひびけかくてるのわざ）』です。

歌舞伎はもともと、時代の出来事や人々の関心を取り入れながら発展してきた芸能です。今起きている社会の課題を作品に取り入れ、現代を生きる人々の身近な物語として届けることも、歌舞伎の大切な役割だと思います。

『世響斯輝伎』では、世界中に広がる厄災に、歌舞伎の荒事で立ち向かうヒーロー、松ヶ枝虎之助尚秀を描きました。困難に対して、ただ立ち尽くすのではなく、仲間と力を合わせ、表現の力で立ち向かう物語です。

その後も、平和、困難からの再生、環境問題をテーマにした作品を生み出しました。

『平和成祈鐘（へいわになれやいのるはこのかね）』は、ニューヨークの国連本部にある平和の鐘を題材に、戦争や紛争のない世界を願う作品です。鐘が鳴らなくなった理由を、いまだに戦争や紛争が続く世界への嘆きとして描き、主人公が「世界絶対平和」の実現を誓うことで、平和への願いを舞台上に響かせます。

『舞台交響曲』は、誰もが知るラジオ体操によって日常を表現し、そこから崩れていく日常と、困難を乗り越えて未来へ向かう人々の姿を描いた舞踊作品です。歌舞伎の名せりふ「星満々たりといえども、月の光に勝つこと能（あた）わず」に込められた精神とともに、どのような時代にも再び立ち上がる力があることを伝えてい

ます。

『恵心露慈三番叟（エコロジーさんばそう）』は、環境破壊による地球の危機をテーマにした作品です。日本神話の神の使いである八咫鳥（ヤタガラス）に導かれ、世界を旅する松ヶ枝虎之助尚秀が、古来より伝わる三番叟の祈りと舞によって、大地と地球の生命力の再生を願います。古い芸能の力を借りながら、現代の環境問題を考える作品です。

これらの創作歌舞伎は、文化を受け継ぐだけでなく、文化の力によって社会課題を考えるきっかけをつくる試みです。さまざまな企業や団体のご支援のもと、SDGs アクションとして新たな展開も生まれています。

平和への記憶を、次の世代へ

特に忘れられない経験となったのが、『平和成祈鐘』を上演した平和に関するイベントです。2023年9月21日、国際平和デーに開催されたその催しでは、広島で被爆された93歳の方、原爆体験を記録したドキュメンタリー映画の監督、そして私によるトークセッションが実現しました。

被爆体験を語る方の言葉とまなざしには、平和の実現を願う強い想いがありました。私はその話を聞きながら、涙を流していました。その方は、「あと10年もすれば、被爆体験をした人は誰もいなくなるかもしれない」と語っておられました。

だからこそ、体験者から直接言葉を受け取った私たちが、その記憶を次の世代へ伝えていかなければなりません。記憶を受け継ぐことは、過去を振り返るだけではありません。同じ悲劇を繰り返さず、平和な未来を選び続けるための、現在の責任です。

トークセッションの後、私は『平和成祈鐘』を上演しました。体験者の言葉が身体の中に響いていたためか、上演中、これまでにないほど涙があふれました。舞台上で平和を願うことが、単なる演目のテーマではなく、今ここにいる自分自身の祈りになったのです。

その時間は、生涯忘れられないものとなりました。参加された方々の心にも、それぞれの形で平和への想いが残ったのではないかと思います。芸術には、人の心を動かし、異なる世代や立場の人々をつなぐ力があります。私は歌舞伎を通して、平和への歩みを一人でも多くの方と共有したいと願っています。

そして、2025年には、創作歌舞伎における私の歩みの中で、最も大きな舞台の1つとなる機会をいただきました。大阪・関西万博のメインステージ、シャインハットにおいて、2025年9月21日のピースデーに、『平和成祈鐘』を上演したのです。これは、平和への願いを、国内外から多くの人々が集う場所で発信する貴重な機会となりました。

さらに2026年には、外務省の後押しをいただき、ニューヨークの国連本部中庭にある「国連平和の鐘」の前で、写真撮影と動画撮影の許可をいただきました。そして、職員の皆様が見守る中、実際にその鐘の前で『平和成祈鐘』を上演することができました。平和を願う鐘を目の前にして舞台に立てたことは、私にとって大きな意味を持つ経験でした。

いつの日か、ニューヨークの国連本部にある国連平和の鐘の前で、ピースデーにまつわる国連平和の鐘の除幕式や、国際会議などの機会に、『平和成祈鐘』を披露できたら、これほど嬉しいことはありません。そこから



2026年8月 アメリカ ニューヨーク国連本部
「国連平和の鐘」前にて、「平和成祈鐘（
いわになれやいのるはこのかね）」上演

私の中の夢はさらに広がっています。歌舞伎の力を通して、持続可能な世界、社会、未来への貢献につながる機会を、自らつくっていききたいと思うのです。

おわりに 「未来を創る1つの発信として」

何となく歌舞伎役者を目指した一人の男が、18歳のときに歌舞伎の本質に出会い、芸歴24年を歩んできました。その道のりは、決して自分一人の力だけで成り立ったものではありません。先人から受け継いだ芸、仲間との出会い、舞台を見てくださるお客様、そして活動を支えてくださる多くの方々がいて、今日の私があります。

だからこそ、今度は私が受け取ったものを、次の世代へ渡していきたいと思います。歌舞伎を体験として伝え、文化の価値を未来につなぐこと。平和への記憶を受け継ぎ、社会課題について考える場をつくること。環境や地球の未来に目を向け、古来の祈りと現代の表現を結びつけること。

それらはすべて、私にとってのサステナビリティです。

「役立つ者こそ、役者」。この言葉を胸に、これからも歌舞伎の力で社会課題に向き合い、人と人との心をつなぎ、素晴らしい未来を創るための1つの発信を続けていきたいと思います。

歌舞伎役者・中村橋吾の歩みは、まだ続きます。受け継いだ文化を、今を生きる人々の心に届け、次の時代へ手渡すために。

筆者のプロフィール

中村 橋吾 (なかむら はしご)

歌舞伎役者 屋号(成駒屋)

山形県鶴岡市出身。一般家庭から歌舞伎の世界に飛び込み実力をつけ、歌舞伎座を中心に第一線で活躍。TV出演、CM出演等、舞台以外でも様々な分野で活躍。

『大々叶(だいだいかのう)』を名乗り、アーティスト、デザイナー、クリエイターとしても活躍。大阪・関西万博の公式グッズのデザインを担当する。“文化を身近に！”をテーマとした、歌舞伎ワークショップ等の講師として人気を集めている。近年、『社会問題に挑むかぶき者』を名乗り、現代社会問題をテーマとした創作歌舞伎作品を手掛けており、デジタルコンテンツとの融合をプロデュース。

様々な社会課題を世の厄災とし、酒に封じ込めて飲み干すという歌舞伎のヒーローの活躍を描いた作品『世響斯輝伎(よにひびけかくてるのわざ)』や、2020.9.21 国際PEACE DAY 国連平和の鐘を守る会 鐘打式において、国連平和の鐘を題材にした創作歌舞伎『平和成祈鐘(へいわになれやいのるはこのかね)』を上演。フランス パリ、中東 ドバイ での単独パフォーマンスを実現。国内外からの注目を集めている。また、自身のふるさとである山形県の大使をつとめPRにも尽力、羽黒派修験 山伏 の一人でもある。

■無形文化財“歌舞伎”認定保持者(団体) ■カリフォルニアプルーン協会初代アンバサダー ■FANO 平和の風 アンバサダー ■山形県 やまがた 特命 観光 つやひめ大使 ■山形県 鶴岡市 ふるさと観光大使 ■羽黒派 修験 山伏 尚齋 日本俳優協会奨励賞・国立劇場奨励賞等受賞歴多数。

